

教科書における帝国の風景

—— 戦前地理教科書の写真使用を中心に ——

韓 炫 精

はじめに

本稿は戦前地理教科書の風景写真を通じて帝国空間の視覚的演出をたどったものである。20世紀前半における教科書は、複製・映像技術の発達とともに「読む」だけでなく「見る」メディアとして開かれ、見る身体と交差する社会的場であった。というのは、教科書のイメージが教科書刊行者を含めた当代の視覚文化が反映されたものであり、イメージ自体が固定された物質であることを超えて、人間による意味作用のプロセスを含めているからである。したがって、教科書に記述された言説の配置や選択に沿っていくと、教科書を見る主体の認識の布置を分かるようになる¹⁾。

空間の視覚的表現に代表的なのは測量術による地図がある。一方、空間をきわめて客観的に記述してもそこからこぼれ落ちる思いを「風景」と呼ぶ。社会学辞典によると、「風景」はわれわれを取り巻く空間の眺めの総体であり、それをどのような意味のシステムとして認識するかという、認識過程をも含み込んだものである。一目で見渡せる自然の眺め、都市の景観、情景など、主体である人間が一定の美的・価値的視覚から切り取って、評価の対象とした環境・自然の存在形態を意味する²⁾。

教科書写真が提供する「風景」は、写真固有の実写性が伝える客観性と写られた場所を何として解釈するかの主観性が交わって目の訓練が行われる地点であるために、教科書イメージを語る際に興味深い部分である。従来、「風景」はナショナリズムと関連して扱われてきたが、地図測量や写真技術が発展する18-19世紀は世界各国に領土獲得をめぐる競争に激しい時期であり、地図や写真は植民地に関する情報を記録して本国に知らせ、また支配するための重要な手段として働いた。帝国史家のRyanによると、植民地が帝国市民にプライドやアイデンティティの資料を提供し、植民地写真は帝国の国家認識発達に

貢献したことが明らかになっている³⁾。視覚メディアの技術と帝国期の時代を全般的に見なければ、近代教育のダイナミックな意味作用の試みを見逃してしまう。

日本に写真が普及され始めたのは1880年代以降で、雑誌・新聞に写真製版が始まったのは1905年の日露戦争以降になる⁴⁾。写真という近代技術は汽車の窓と似ていて風景を四角形に切ることでコンテキストから取り出して独自の意味を与えた。紙の上で固定されてはじめて取り出された画面の中だけでの現実、現実感受の新たなレベルを成立させた⁵⁾。

戦前教育においてまなざしの問題を扱った先行研究は、主に図画教育が多い⁶⁾。しかし、領土が拡張され、国民及び植民地人に大日本帝国の実体を訴える必要から出現した戦間期の教科書イメージに関してはあまり議論されてこなかった。教育における国家・帝国の視覚的伝達が本格化したのは第一次世界大戦以降の地理教科書である。村山は地図・写真・グラフの分布の変化を明らかにした⁷⁾。これら視覚的技法の発展は以降も続いており、教科書は国家演出の主な劇場⁸⁾として見る視点が必要となる。教科書のイメージを扱った先行研究の中で、武島は国史教科書における戦争の写真使用に関して⁹⁾、森茂は歴史教科書の中の人種表象を分析した¹⁰⁾。従来には稀であったこれら教科書の写真・表象の研究は、戦争、人種など外部世界の出来事や現象を教科書がどう表すかというイメージの内容を中心に考察した。それに対して、本研究は外部世界と教科書の表現の間のみならず、教科書自体の再構成によって各イメージが新たな意味を獲得し、総合的に国家・帝国空間を分節するフレームに注目した。それでは教科書上のイメージをどのように再構成するか。本研究はD. Gregoryが『地理的理想力』で提示した空間認識の基準、つまり、境界borderや枠づけenframing the worldを「大日本帝国」の可視化に応用して、教科書が帝国空間の内外、植民地と帝国の関係性をど

のように演出したかを考察する¹¹⁾。実際、国境、地域間の繋がり、生産と自然などはそれが指し示す確実な実態を持っていない概念であるが、まるでであるかのように演出され、また提示する空間を解釈する特定の態度を作り出す。先行研究に比べて、教科書におけるイメージ群の相互関係を見る本研究は、事例をより多く確保するために帝国日本の領域で刊行された初等学校の地理教科書を網羅してみることで、空間の対する写真の扱いを縦横的に考察する方法をとった。対象になった地理教科書は図1のようである。また地理教科書以外にも必要に応じて国語、国史、算術教科書の地理的内容を参照した。

本論に先立って領土に関する叙述変遷を各地理教科書の冒頭にある帝国空間の説明から概括してみる。以下では1903年から1944年まで文部省刊行の地理教科書の帝国空間の記述を扱う。1903年『小学地理』では、日本全図や各地方県の地図を主に使用しており、本文では「わが大日本帝国は、多くの島々より成れる国なり。その中にて特に大なるは、本州、四国、九州、北海道本島、台湾の五つなり。北海道本島の東北には、千島の島々、飛び石の如く、並び、九州と台湾との間には、琉球の島々、また、飛び石の如く、ならべり。」とって「飛び石の如く」の比喻で連結を表現した。位置・形態の表現として「囲む、に臨む、流れる、出て、向いて、跨る。向かい、渡り、至る。一より来りて、過ぎ、渡り、入る」など動きや方向を表す動詞を使用した。帝国内の人口の説明では後部に「これらの人人は、上に万世一系の天皇をいただきて、みな、たのしく、その日をおくれり。」と、天皇を賛美する表現で国土の広さや人口の表現をまとめている。

1910年『尋常小学地理』は、「わが大日本帝国は、亜細亞洲の東部に位し、東北より西南に連れる日本列島と大陸の東岸に突出せる朝鮮半島とより成る。…小なるものに千島列島及び琉球列島をなせる。」と書いて、世界像の中で帝国を位置づけ、この時期に拡張した帝国の領土（朝鮮、樺太）を入れている。1期教科書の国土表現が個々の島の合算であったに比べて、2期における領土は「列島、半島」など地

理的用語で表現された。そして<接近し、控う、境す、対す、隔てて>など周辺国との関係を表す動詞を使った。「住民は概ね大和民族にして、…忠君愛国の心に富めり」と、人々が「民族」範疇で呼ばれ始めた。

1921年『尋常小学地理』では、漢字の亜細亜をカタカナの「アジア」に変え、新しく編入した領域を「本州南方の洋中には小笠原諸島あり」と書いた点が変化である。帝国領土に関する表現は「我が大日本帝国は、列島中の大なるものには、中央に…」と国土の内部を位置や大ききで序列化し、領土の比率をグラフで表している¹²⁾。国家構成員を住民から「国民」に変えており、その他、朝鮮人、台湾土人、支那民族、アイヌを記録し、「民族は相異なれども、ひとしく忠良なる帝国の臣民たり。」とまとめた。

1934年『尋常小学地理書』は、「日本列島の北東から西・西南にかけてはオホーツク海・日本海・黄海・東支那海があって、これ等の海をへだたててアジア大陸のシベリヤ・満州・朝鮮及び支那がある。日本列島の南西から東にかけて太平洋の中にフィリピン諸島及びハワイ諸島、その他大洋州の島々がある。」と海を中心に陸地や島を表現しているのが特徴である。「満州から租借している関東州がある。又委任統治地である南洋群島がある。」と関東州と南洋の表現が出た。そして、以前にはなかった各地方項目の下位にあった人種写真(「台湾土人とその住家」、「アイヌ人とその住家」、「ギリヤーク人とその住家」)が大日本帝国の概観部分に置かれていた。

1938年『尋常小学地理書』の特徴は、本州の南方に「伊豆七島」が加わり、南洋には「わが南洋群島」と表現されている。挿画には「台湾の土人」や「樺太の土人」に加えて「南洋の土人」写真を使った。同じ時期の朝鮮総督府刊行の『国史地理』(1938)における領土(図2)は、パズルの欠片の形で提示されている。領土は環境に固定されたものではなく、鮮明な輪郭を持つもの、大ききで並べて比較可能なもの、単独にロゴ化されるものになったのである。

1943年『初等科地理』は、「日本の地図をひいてみませう。」という表現から始め、「…北の千島列島、

	1900	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45									
国	M33	M34	M35	M36	M37	M38	M39	M40	M41	M42	M43	M44	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8	T9	T10	T11	T12	T13	T14	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10	S11	S12	S13	S14	S15	S16	S17	S18	S19	S20									
4年	M36 H9 小学地理 ①											M43.1	尋常小学地理 ②											T7.2	尋常小学地理書 ③						T14.1	尋常小学地理書 ⑤						S77.1 歴史の経緯											4年						
5年	M36 H9 小学地理 ①											M43.1	尋常小学地理 ②											T7.2	尋常小学地理書 ③						T14.1	尋常小学地理書 ⑤						S13.3 小学地理書⑥											S12.2 沿革科地理						5年
6年	M36 H9 小学地理 ①											M43.1	尋常小学地理 ②											T7.2	尋常小学地理書 ③						T14.1	尋常小学地理書 ⑤						S13.3 小学地理書⑥											S12.2 沿革科地理						6年
合計	M36 H9 小学地理 ①											M43.1	尋常小学地理 ②											T7.2	尋常小学地理書 ③						T14.1	尋常小学地理書 ⑤						S13.3 小学地理書⑥											S12.2 沿革科地理						5年
5年	M36 H9 小学地理 ①											M43.1	尋常小学地理 ②											T7.2	尋常小学地理書 ③						T14.1	尋常小学地理書 ⑤						S13.3 小学地理書⑥											S12.2 沿革科地理						5年
5年	M36 H9 小学地理 ①											M43.1	尋常小学地理 ②											T7.2	尋常小学地理書 ③						T14.1	尋常小学地理書 ⑤						S13.3 小学地理書⑥											S12.2 沿革科地理						5年
4年	M36 H9 小学地理 ①											M43.1	尋常小学地理 ②											T7.2	尋常小学地理書 ③						T14.1	尋常小学地理書 ⑤						S13.3 小学地理書⑥											S12.2 沿革科地理						4年
5年	M36 H9 小学地理 ①											M43.1	尋常小学地理 ②											T7.2	尋常小学地理書 ③						T14.1	尋常小学地理書 ⑤						S13.3 小学地理書⑥											S12.2 沿革科地理						5年
6年	M36 H9 小学地理 ①											M43.1	尋常小学地理 ②											T7.2	尋常小学地理書 ③						T14.1	尋常小学地理書 ⑤						S13.3 小学地理書⑥											S12.2 沿革科地理						6年
4年	M36 H9 小学地理 ①											M43.1	尋常小学地理 ②											T7.2	尋常小学地理書 ③						T14.1	尋常小学地理書 ⑤						S13.3 小学地理書⑥											S12.2 沿革科地理						4年
5年	M36 H9 小学地理 ①											M43.1	尋常小学地理 ②											T7.2	尋常小学地理書 ③						T14.1	尋常小学地理書 ⑤						S13.3 小学地理書⑥											S12.2 沿革科地理						5年
6年	M36 H9 小学地理 ①											M43.1	尋常小学地理 ②											T7.2	尋常小学地理書 ③						T14.1	尋常小学地理書 ⑤						S13.3 小学地理書⑥											S12.2 沿革科地理						6年
* 日本地理教科書、地理研究教材を発行期に入れるか検討の必要																																																							
T3.3 (国本) 日本地理教科書 学年?													T10.2	T12.2 普通小学校地理補充教材 完 児童用 学年?												S7.3 初等地理書						S12.3 初等地理						S16.4 初等地理						S19.3 国史											
T3.3 (国本) 日本地理教科書 学年?													T10.2	T12.2 普通小学校地理補充教材 完 児童用 学年?												S7.3 初等地理書						S12.3 初等地理						S16.4 初等地理						S19.3 国史											
T3.3 (国本) 日本地理教科書 学年?													T10.2	T12.2 普通小学校地理補充教材 完 児童用 学年?												S7.3 初等地理書						S12.3 初等地理						S16.4 初等地理						S19.3 国史											

(表の典拠：白柳弘幸、2008)



朝鮮総督府『国史地理』1938

中央の本州、南の琉球列島が、それぞれ太平洋へ向かって弓なりに張り出しているぐあひは、日本列島全体をぐっと引き締めているやうで、かうした形から、われわれは何かしら強い力がこもっているやうに感じます。日本列島は…太平洋へ向かってををしく進むすがたが想像されるとともに、また太平洋に対して大陸を守る役目をしているやうにも考えられます。」と領土の表現が比喩に満ちている。帝国領土の説明はその間の関連性を強調した。「…の間に掛けられた橋のやうで、…とを結ぶ大切な通路になっています。…海峡は、…へ行く船の通道として大切な所で、…。これら海や海峡は、…交通上また国防上に、非常に大切である。」と、地域と地域を繋ぐ海の言及が増えている。次に、「大東亜の地図をひらいてみませう。」と進めたところでは、『初等科地理』における世界は、アジア地域に制限されており、その他のヨーロッパや北南アメリカは消えている。大東亜領域に新たに入ってくる領域は「ルソン、ミンダナオ、ボルネオ、スマトラ、ジャワ、セレベス、パプア、…インド支那半島のマライ、ビルマ、インド、豪州、ニュー事ランド、ハワイ諸島」などがあり、最後の部分では「神代の昔から海の魂によってはぐくまれ、…海に陸にのびていく使命をはたすにふさはしい位置を占め…」と、領土に対する価値観を示している。

1903年の初期地理教科書は領土の名称付けや相互間の位置を知らせるために地図を利用し、領土が為政者の賛美と繋がっていたに比べて、1938年の地理教科書になると、実際領土との関係よりは紙上ですでに完結したものとしてとらえられている。教科書における領土表現は、地理学的、人類学的、統計学的知の影響でより詳細になっていく。その中で、従

来見えないものを見せたり、見えたものを隠したりしている。教科書の領土記述の通史的考察を踏まえて、本論では教科書の写真の内容と技法を通じて「大日本帝国」の空間がどのように区切られて伝わったかを見てみる。

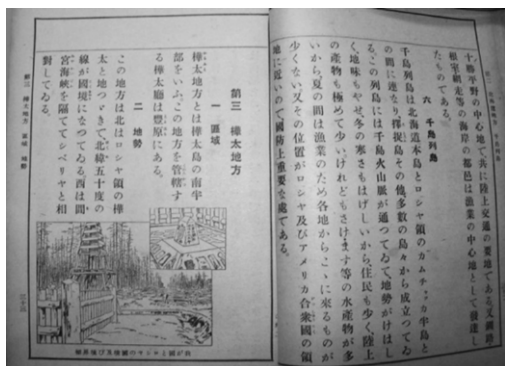
1. 帝国の国境：教科書における内と外の表象

(1) 地上に描かれた境界線

帝国間の領土競争が激しい20世紀初めに植民地を含めた領土は単なる支配対象ではなく、本土の国民に実体として知らせる必要があった。この際、国境の表象は重要になったが、領土が繋がっていない海洋帝国の日本は地図上の領土説明のみならず、国境の内と外を区切る明確な要素が必要であった。実際、国境は地上で見られるあるものに相応するものではなく、二つの主権の間にこまれた排他的主権を表示する垂直的な断絶線を共有する認識の上に成り立っている。隣国との関係は地図によって提供され、空間的現実として収斂されはじめた。アンダーソンは、境界線の国土観念によって、従来の領土が神聖な首都、可視的で非連続の人口の中心地と理解されたものから、限定された領土空間として想像された国になったと述べた¹³⁾。地理教科書が示す国境線は、実際自国と外国の断絶を表すものではなく、国境線という言葉を作ることによって外国と自国、中心と周辺の二項対立を事後的に派生させたと言える。

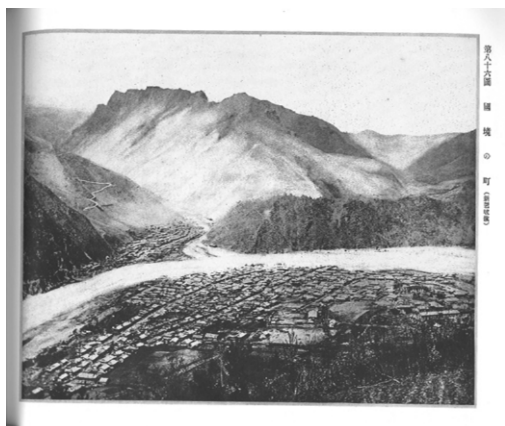
国境線の言説の中で地上の境界が問題視された地域は樺太である。日露戦争後に日本領土になった樺太は、本来居住人口が少なく原住民をコントロールする課題がある地域であった。認識に乏しい領土を知らせるために、本来物理的に繋がっている空間をどう表現しただろうか。1910年の教科書から現れた樺太は、地図の南地域のみを提示し、国境線を記念する碑石を強調した。

一方、朝鮮の場合には中国との国境を写真で視覚化したのが、それは1929年朝鮮教育会によって刊行された『国定教科書に現れたる写真資料集』の中に「国境の町」や「国境を守る人々」という題目で載せられた。



文部省『尋常小学地理書』下1919

写真aは真真中に川が流れる町の風景である。「国境の町」というタイトルに、朝鮮の咸鏡南道、国境の屈指の町を解説している。この町は鴨綠江と支流の長津江との交差点にあり、向こうの町は13道江戸



a 「国境の町」



b 「国境を守る人々」

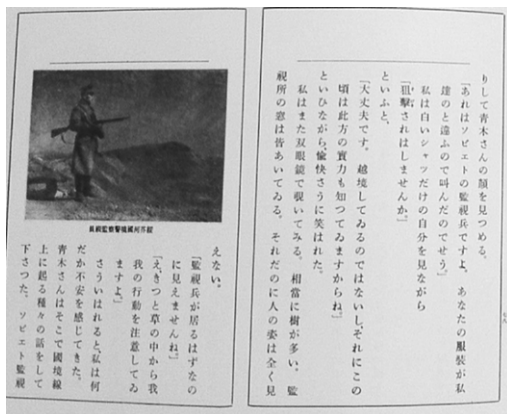
(写真出典：朝鮮教育会、1929)

という名の中国町と分離感を表している。続いて、町の大きな建物を中心に守備隊、警察署、郵便局の説明を加えて、この地域の政治上、軍事上の価値を述べている。写真bは軍人二人を後ろ側から取ったものである。「国境を守る人々」というタイトルで、解説には「国境環境の過酷さや彼らの苦勞」を語った後、向こう側が中国の間島山であると説明した。向こうを向いている軍人の姿から国境は実体化されるのである。

下の教科書では、1932年に満州国が建国された以降、教科書における国境線を見られる事例である。『満州補充読本』(1936) 高二の巻の第11課「国境の山」では、ソ連と満州国の国境を訪問した主人公が軍人と会話する場面がある。国境がどこかと問う主人公に軍人の青木さんは次のように答える。

「青木さんは二百米位の麓を指さされる。私ははっとしてその地点を凝視する。別に変わったこともない同じような草山だ、等しく夏の草が茂って花が咲きみだれている。…「別にこれといった境界線もみえませんが、」国境線には海とか、河とか、山脈の峰とか、又は人為的な標識といったようなものを予想している私は、何も無いこの国境にめんしてさう質問した。「国境線といっても此処にははっきりしたものはありません。左はあの谷を横切って向こふの高い峰の中腹を通る線です。右はその山の？から舞い上がって、あの峰にかけた一線つまりそれ位の漠然とした線が、満蘇両国をゆだてる国境線となるわけです。」

境界碑や軍人の身体を通じて本来見えないものの可視化が教科書に記録された。開かれた空間に線を引き内と外を分けるまなざしは、帝国が海の向こ



国境の山『満州補充読本』高二の巻1936

うに拡張される時期にはどのような視覚的戦略を取ったのだろうか。

(2) 海上に描かれた境界線

大陸上の国境表現とは異なって本土の島々は離れており、特に南洋の島々は地図上においても相当離れており、文化的側面も異なる地域であるために、別の包摂するイメージが必要であった。陸地の場合は、元々つながっている風景を川や山、碑石などで分けるレトリックを駆使したなら、海をまたいで元々離れている島の場合、地図上の領土説明に海洋地理学的知識や文学的比喩、そして視覚性を持つ動詞を使った。1938年『尋常小学地理書』に日本列島は、「太平洋の中に連なっている大小あまたの島々である」と表現した。1943年『初等科地理』には「弓なりに張り出している」という比喩を、1941年台湾の『公学校地理』には、「九州と台湾の間に繋がった琉球列島…」など目線を離れた地域の間に置く表現法を使った。

最も特徴的な変化は、1938年地理教科書の大日本帝国の概括に「人種」の写真が載ったことである。従来、アイヌは北海道や樺太に該当する課で、台湾土人は台湾の課で説明されたが、戦中期の教科書には帝国の臣民として少数に過ぎなかった人種や彼らの異国的風景が最初の頁へ移ってきたのである。今まで見えなかった帝国の少数人を可視化する意図は何か。

これは「大東亜共栄圏」が主張されえる時期に、帝国内部のプロパガンダの反映として見ることができる。実際、アイヌ族は1920年日本籍へ変えられ、1933年からは義務教育の対象になった。台湾土人の主を担う高山族に対して1930年代から社会教育が活発になっており、南洋への日本人移住が増加する1937年から南洋土人の就学率が増加し、帝国の少数

者に対する関心や編入状況の反映とも言えるだろう。土人の写真は時期によって異なっているが、彼らが住んでいる住家を背景に土人集団がカメラの前で並んでいる写真が主を占めている。「大日本帝国」の少国民には多少異質的な風景が大東亜共栄圏を現そうとする社会的文脈と繋がっている。人種を中心にした異文化の可視化は太平洋戦争期の教科書により多量に現れる。

1918年の地理教科書におけるアジア課は中国、シベリア、印度、東南アジアに分けられ、挿画は中国の風景が主であり、東南アジアのものは使われなかった。しかし、1935年の教科書に初めて東南アジアの風景が使われて、1943年には戦争と関わって東南アジア諸島の風景が多数掲載された。戦争中の東南アジア、南洋地域は他帝国と関連する地域であるだけに、これらの地域と新たな連関性を演出するために、人種は重要な記号になった。

次の四つの写真は1943年『初等科地理』の写真である。写真aは「フィリピンの火山」というタイトルのものであるが、向こうに三角の火山がかすかに見える中でより明確に写しているのは、原住民の子どもがいる日本軍官庁の庭とその玄関に掛けられている日の丸の旗である。写真bは、ボルネオの原住民であり、教科書の左側にはボルネオの東にあるセレベスに落下する日本軍の落下傘部隊の写真を並べ、異国の風景に係わる日本を演出している。写真cは従軍画家で活動した伊原宇三郎が1942年に制作して聖戦美術展覧に出品した「マングレー入城とビルマ人の協力」である。この作品は次年の1943年『初等科地理』に掲載された。画題のどおり、畫幅の真ん中には日本軍人たちに水を上げるビルマの住民を描いてビルマ人の協力を表現した。教科書の絵画は白黒の写真製版にとどまっているが、原画の右下には黄色の袈裟を掛けた僧侶の姿を描き、日本人が交



アイヌ



樺太



南洋

出典：文部省『尋常小学地理書』1938

流するビルマという場所を佛教の精神世界へ化することで、境界線の外か内かが明確でない戦争場のビルマに介入しようとする鮮明なまなざしを入れ込んだ。地理教科書に絵画が使用されたのはこの時期が初めである。

挿画dは「ソロモン諸島の子どもたち」というタイトルで、コンテあるいはクレヨンの厚いタッチで描かれたものである。実写的風景を載せてきた従来の地理図像とは異なる技法である。厚い線のスケッチ風の図像は、当時軍人が本国に送ってくる絵葉書でよく見られるもので、物事を「移動」しながら「写生」する行為が絵の中に含まれている。この絵は、太平洋戦争期の最前線の場所を人種と表現技法で視覚的に専有している。見る-見せるという行為が戦争期に新たに編成されていると言えるだろう。

近代の国土の視覚的表象は、地図の地形や輪郭あるいは記念碑で表現されるものから、徐々に人種を通じて異質的なものと出会う空間を表現するようになった。特に、写真の中に日本の象徴を入れた上左や教科書の写真レイアウトで解釈を促進した上右に

比べて、下左や下右は描き手の解釈を通した絵画で、表現方法をも地理情報の伝達に動員している。

戦時期の地理教科書の叙述対象は世界の中の「大日本帝国」ではなく、単なる「帝国」であり、境界線の風景が人種や異国風景を通じて可視化されていた。この時期は帝国の最大拡張期であると同時に、帝国の外は見えない空間意識を反映している。

2. 帝国の網

(1) 教科書における移動の風景

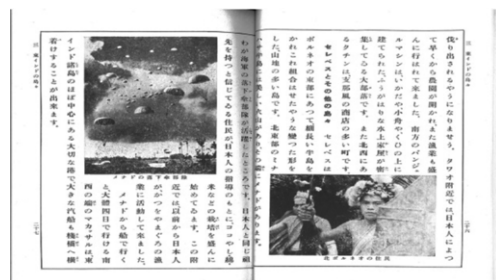
教科書における地理的拡張は交通機関を媒介に語られた。最新の汽船、汽車、そして飛行機は技術文明の象徴であり、国家・帝国の進歩を表すものであった。

鉄でつくられたこれら交通機関の形態は、船や飛行機の場合は横面を、汽車は遠近法的取り方をした写真を使っている。

関釜連絡船は1905年山陽汽船株式会社によって開設され、韓国の京釜鉄道や日本の東海道、山陽、九



a 「フィリピン島の火山」



b 「ボルネオ島の住民」



c 「ビルマ人の協力」



d 「ソロモン諸島の子どもたち」

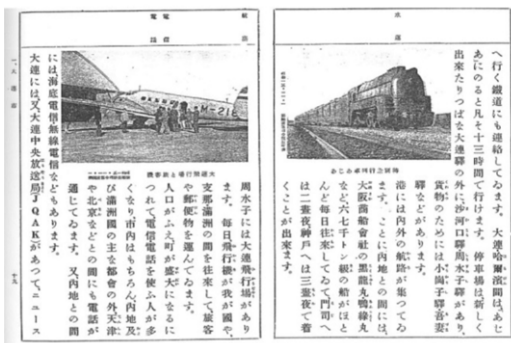
出典：文部省『初等科地理』1943



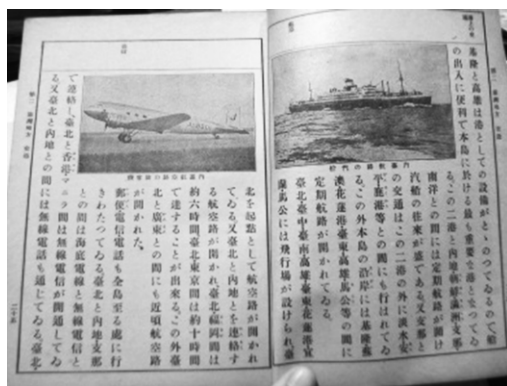
朝鮮『初等地理書』1937



関東局『皇国の姿』1942



大連飛行機場、「大連-哈爾濱」のアジア号
『満州補充地理教科書』1940



台湾一内地の飛行機と汽船
台湾『公学校地理書』1941

州鉄道間の旅客、手荷物、速達取扱貨物の連帯運輸を開始した。内地と台湾を結ぶ「内台連絡航路」には、「高砂丸」が4、5日に一回割で、神戸と基隆の間を航海した。交通機関は帝国内に繋がりを表すイメージで使われたのである¹⁴⁾。飛行機の場合、1928年に日本航空輸送株式会社が通信省管の航空会社として発足し、1929年に運航を開始した。日航は1938年国策会社に改造され、日本航空会社が民間航空輸送を統合するようになった¹⁵⁾。

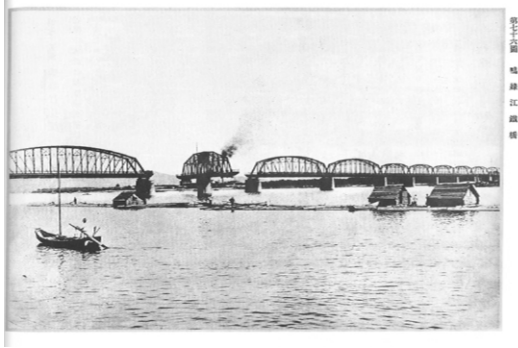
繋がりの想像は交通機関だけではなく。港、駅、停留場、飛行機場などの風景は勿論、橋、トンネルも地域と地域の間を渡る表象として使われる。

「鉄道は出来るだけ平坦な道を走った方が経済的であるために、橋、トンネルなどその進路を改造する。それによって生まれるのは、それまでにはなかった線的、幾何学的景観であった¹⁶⁾。」橋は分離されている場所をつなげる技術であり、移動現象を表すイメージの一種である。それに伴い、地域表現

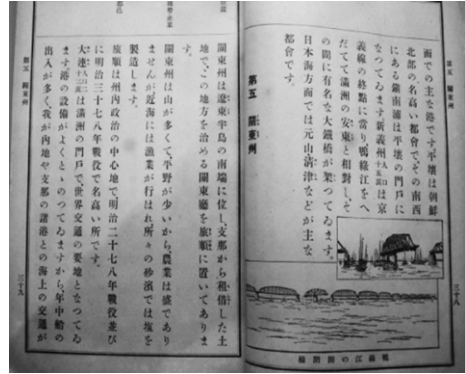
にも「渡る、通じる、交差する、過ぎる、抜ける、横切る、曲がる、超える」など空間移動の動詞が頻繁に使われた。

a や b は鴨緑江鉄橋の写真や教科書図像である。鴨緑江鉄橋は朝鮮の新義州と中国の対岸の安東（現在の丹東）間をつなげる橋であり、1902年計画され、1911年に竣工された。朝鮮中国間に直通列車が走った。船の航行に適合するように中央部に開閉式の橋梁を設置した。開閉橋は一日中に午前と午後一回ずつ開閉した。建設費は中国と日本が分担し、当時一番長い鉄橋として、その制作に様々な国が参与していたために、東洋第一の国境名物と呼ばれていた。

c の図像は清水トンネルである。清水トンネルは関東との往来が不便な地域であった新潟に1914年通した磐越西線建設されたもので、その技術の発展以外にも地方と中央をつなげる象徴的装置と意味づけられる。d は雪よけトンネルである。地方の遠さと孤立性は交通網の発達によって失われ、河と山と雪



a 鴨緑江鉄橋



b 鴨緑江鉄橋



c 清水トンネル

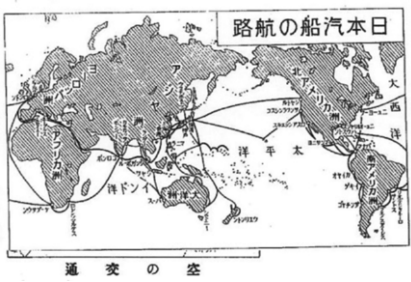


d 雪よけトンネル

a 朝鮮教育会1929年刊の複製『朝鮮資料写真』、1996、b. c. d. 出典1941台湾地理教科書

など自然を超えて繋がるのである。交通機関のイメージは帝国をタブロ上に都市で構成された空間へと均質化した。

次は1930年代以降の地理教科書に頻繁に掲載された交通図である。交通機関や地域間をつなげる通路装置のイメージで表現された帝国の広領域は、もはや地図上の網で可視化され、空間内の連結性を可視化している。その上に、空間は時刻表で計算したら到達できるものへ変換した。以下の算術教科書の問題は空間観念の変化を確実に表している。



汽船路 1938 朝鮮『国史地理』



航空路 1938 朝鮮『国史地理』

「父は、近く満州開拓の慰問旅行をする。昨夜も、地図と時刻表を出して予定を立てていた。下の地図で、東京から新京へ行く道順と距離を調べよ。」(文部省『初等科算数7』昭和18、旅行)

<問題88>奉天から門司に行くに、大連を経由すると、朝鮮を経由すると何れが何程近いか。左の図によって計算せよ。(満州日本人用『地理算術補充教材』5年、1937)

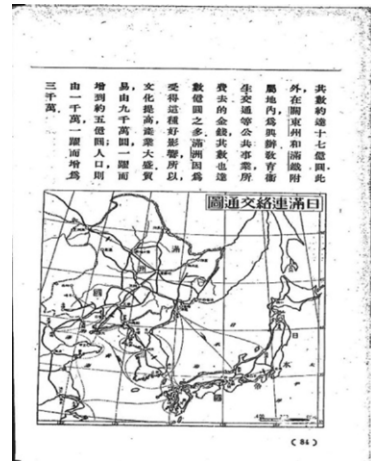
目の前にある線路から、見ることができない日本の国土全体を想像することを「鉄道の想像力」¹⁷⁾といえるなら、鉄道の想像力は汽船や航路を通じて植民地や海外へと広がってゆく。交通機関の形、通過装置、そして線路が描かれた地図は、地図上の線が確実に遠い地方へと繋がっているという知識が、想像の線路を生み出し、帝国日本と言う抽象的で均質的な空間を現出¹⁸⁾させたのである。

(2) 帝国の賑わう陳列場

地理教科書が初期から掲載する写真は世界各国の都市風景である。西洋都市の写真は、市街地を高いところで鳥瞰するものから徐々に真ん中に塔や城のようなランドマークをおくもの、横に広がるパノラマ的風景、そして航空写真の効果を持つ都市写真へ変遷した。地理教科書は、国家・帝国を構成する地



鉄道網 1933『満洲補充地理教科書』日本人用

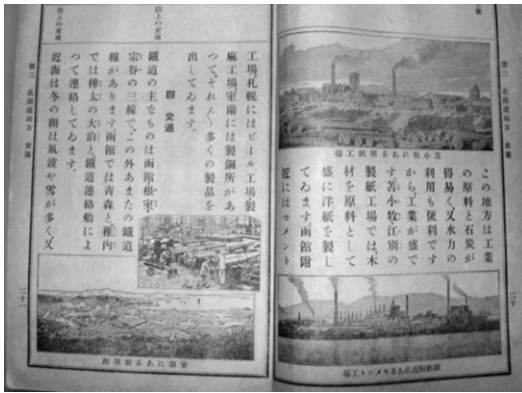


1935『満洲補充地理教科書』満州人用

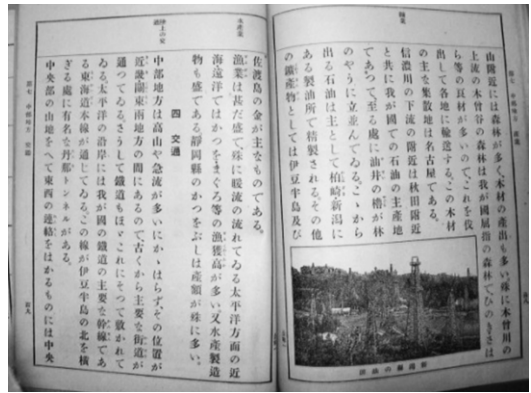
域の代表的な写真を地域順の一定の数で掲載して、帝国の部分視覚化する陳列場の機能をした。

① 尖塔の構図を持つ風景

地理教科書の風景写真を分類すると、都市全景、生産風景(山、海、平野、工場など)、建築物(神社、行政建物、記念物)、移動風景(交通機関)、自然風景(動物植物および風景)に分けられる。その中で、都市全景や近代的生産場面に共通的に現れるのが塔あるいは何かがそびえた風景である。雑多な印象を減らしてより印象的風景を提示するために、教科書の写真は神社、駅、官公庁などの建築物をズームアップしたり、神戸港のように高い所で眺めてパノラマ的広がりを見せたりしたものが多い。その中で特徴的なのは真ん中に大きい建造物を置いた風景である。細間は塔から眺める行為を近代の眼差と結び付



北海道の製紙工場



新潟の製油所

出典：1920、1930年代地理教科書に共通

けたが、教科書の写真はむしろ塔的なものを含めるものであった¹⁹⁾。エッペル塔のように塔自体を対象にしなかったものの、教科書の四角形のフレームには塔の構図を持つ風景を使っていた。この時期の地理教科書が特に強調したところは生産の可視化であった。産業大国として「大日本帝国」は煙が噴き出る工場で描写され、生産の典型を作っていた。

② 輸出の風景

教科書における植民地の風景にも生産のイメージが貫いている。aの写真は朝鮮の港である群山から米が輸出される場面であり、bは地理教科書の群山港の図像である。群山港は1899年開港して、朝鮮内で生産された米を輸出する前哨基地として利用された。

この写真は当代の朝鮮内の対立言論など現れなく、あまり興奮をかきたてないようなやりかたで紹介されている。しかし、教科書における朝鮮地域の

典型になった群山港の風景は、1918年の日本の米騒動と「外米管理令」、1920年朝鮮総督府の産米増殖計画の進行の真真中に置かれていた。米をめぐるイデオロギーは朝鮮児童用の『国語読本』に次のように表現されている。

「私は全羅北道の平野に生まれた米でございます。…さて、この先はどう成ることかと思っていると、土日ほどたってから、米商人に買い取られて、群山に送られ、此処から汽船に積み込まれて、内地へ行くことになりました。まだ見たことの無い所へ行くのがうれしくて、生まれ故郷の朝鮮をはなれることは、別に寂しいとも思いませんでした。…汽船の中では、色々の荷物と一緒に、暗い船底に入れられて居ました。暗いのはがまんが出来ましたが、きかいの音がたえずがたんがたんひびいて、…群山を出てから三日目に大阪に着きました。…以前の朝鮮米は砂がまじっていたり、かんそうがわるかったりし



a 「群山港」 朝鮮教育会『朝鮮資料写真』、1929



b 1931『台湾地理教科書』「朝鮮地方」

てこまったが、近頃は大ヘンよくなりましたね。」朝鮮総督府『国語読本』1932 6巻9課「朝鮮の米」

読本の本文は米をめぐるイデオロギーを叙述することで群山港の米輸出に対する解釈を方向づけていた。これは、帝国の表象によって場の支配が成功したとも言える。擬人化された米は帝国の中心に吸収されるからである。しかし、同時に帝国に対する内部と外部両方の抵抗の印とも言える。解放後韓国側の教科書には同じ写真が植民地時代の搾取の証拠で使われた。

もう一つの写真bは「そのの綿の積み出し」というタイトルで1939年『外南洋の写真集』aから教科書に収録したものである。写真と関連して本文には「未開の大島パプア地域に日本人がもくわを耕作して開発した。」と説明している。大量のめんを受動式レールにのせて裸足で積み出すのは黒い肌の原住民であり、背景にはヤシの木がある。米輸出の写真と同様に、「積み出し」の風景にはめんかを栽培した像主に向ける写真家が本文の話し手として消去され、ただ記録した眼として提示されている。

教科書の写真が重要な理由は、写真が表象される空間であると同時に現前する空間であり、フレームである同時にフレームの内部でもあるという点にある。教科書に描かれた「大日本帝国」において南洋とは、生産技術を伝えて生産量をあげるべき開発対象であり、架空してない山ほどのそのの綿は、現地ではどうしようもなくそれを相応しく扱ってくれるところへ移しだされるのを待っており、後ろのヤシやレール、裸足の労働者はその無気力を支える要素と働いている。ここで帝国のまなざしは時間的に前

へと向かうと同時に、空間的に外へと向かう。異国の風景に開かれる見通しは単なる空間的景観ではなく、発展と搾取とが投影される未来なのである²⁰⁾。

教科書の農業、工業、流通の風景は帝国の各地域を特定の枠で可視化するなかで、生産大国の面貌を表した。目に見えない生産は、尖塔の構図や原住民と共に写られた積み出しの場面を通じて可視化され、帝国内の地域間の位階を立てる機能をした。

3. 帝国の自然：教科書におけるピクチュアレスク

① 帝国の山々

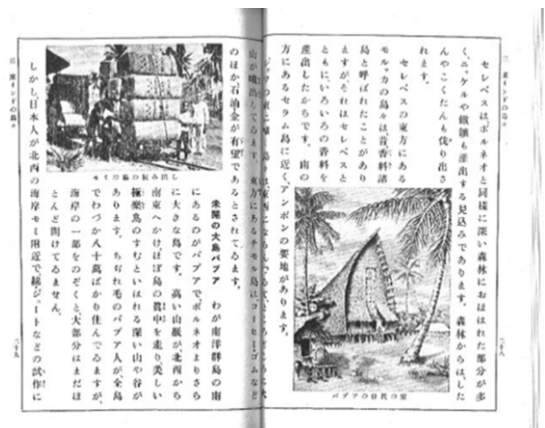
1930年代末から改訂された地理教科書に重要に現れたイメージは自然に関するものである。実際、地理教科書に山が初めて扱われたのは1920年代である。「大日本帝国」の各地域の説明に地図と共に山が台頭したのである。内地では阿蘇山、富士山、朝鮮では白頭山、金剛山、台湾では新高山、満州では望小山の写真が代表的に紹介され、写真は山の独特な形や頂上を強調したものであった。

1930年代の山写真が新たな理由は1931年の国立公園制定法及び12か所の国立公園の指定の影響が含まれるからである。この時期から、帝国空間は2-(2)のように主を占めた各地域の生産的風景と共に、保護すべき無垢の場所へ分節された。無垢の自然、特に山はこの時期の文学や音楽の主題になった²¹⁾。より確かな変化は次の富士山をめぐる教科書の表現の変遷で見られる。

1919年以降の地理教科書に富士山は、汽車が走り、工場の煙突から煙が出る産業化の場面に描かれてい



a 南洋景観写真『外南洋の現勢』1939



b 文部省刊行『初等科地理下』1943



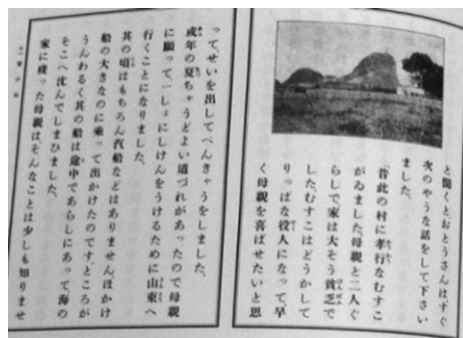
富士山 関東局『皇国の姿』1942



新高山 台湾『公学校地理書』1941



金鋼山 朝鮮『国史地理』1938



望小山 満州『満洲補充読本』1935

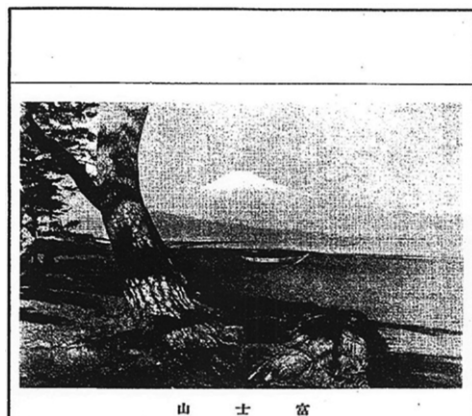
た。しかし、1930年代末からは遠くから眺める山、湖に鮮明に映される自然として、1919・1922年の富士とは異なる新たな位相で描かれた。特に、植民地教科書に使われている富士イメージの技法は、単なる富士山の形を伝える情報のみならず、富士を眺めるまなざしがどう変わっているのかを語っている。1920年代の富士山が技術文明の進歩や発展の背景にあったなら、1930年代の富士山は手書きではなく写真製版としてありのままを写しながらも、富士山を自然として眺める視覚習慣を反映している。移された風景に見る側の感情移入が明確に見え始めたのである。

② ピクチュアレスク：戦時期

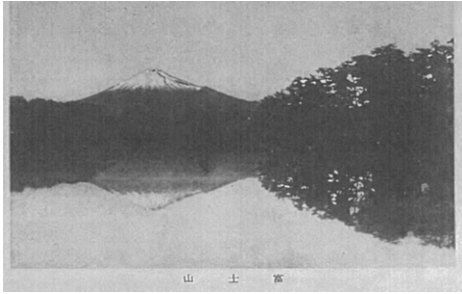
ピクチュアレスクとは「絵のように」という意味で、曲がりくねった道や川、険しい山、伸び放題の樹木などごつごつとしたものを要素にする²²⁾。ピクチュアレスクは、風景に対する感情的意味合いが入り、風景を見る側が自らの知の枠の中に消化する手段として機能する。そして、イメージにそれが指し示すような外部実態がないのが特徴的技法である²³⁾。



a 『尋常小学地理』1919・『台湾地理教科書』1922



b 朝鮮『国史地理』1938



c 朝鮮『初等地理』単色色刷り口絵 1942

1940年代に刊行された諸教科書には自然写真が増え、従来の帝国領土の拡張と繋がりイメージとは異なる、新たな要素を添加していた。山、川、地質、動物、植物など自然風景は産業生産の場所の極端にいて、変わらないものへの享受を呼び起こす場所を構成したのである。下の事例に見られるように、自然風景は風景が風景事態をものさして、特にどこかを指し示すインデクスではない。単なる「川」、「沿岸」「東海道の並木」を写して日本の典型

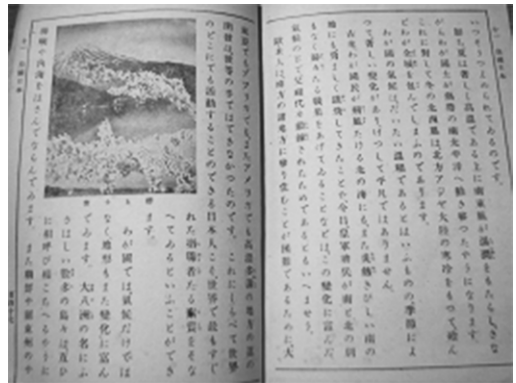
的風景を成していると描写するのである。

教科書の風景写真は色、サイズなど技術的面で進歩しながらも表現的側面では大分抽象的になっている。建築物や記念物などと異なって、ピクチュアレスクのイメージには明確に指示する外部がないながら、風景を眺める一種の感情を形成している。自然風景は学習側にとって即刻の歴史的教訓を与えないが、それを眺める目が向かうべき解釈を方向づけている。教科書のイメージは見る側の自己増進を育てるように期待される。山などの自然は精神的爽快感を含蓄する。波と海辺は瞬間と変化を象徴する。各地域の山で見られるように、地域アイデンティティは帝国としてのイメージ解釈の出現に対立するわけではない。たとえ、台湾の山や朝鮮の山が帝国を意味するには結びつかないとしても、その代わり、国家・帝国は地方読みの上に加えられたのである。各地域の自然風景は、「大日本帝国」が地域のイメージと結合しながら再現される適切な範疇になったのである。

初期教科書における帝国空間は、産業大国を特徴



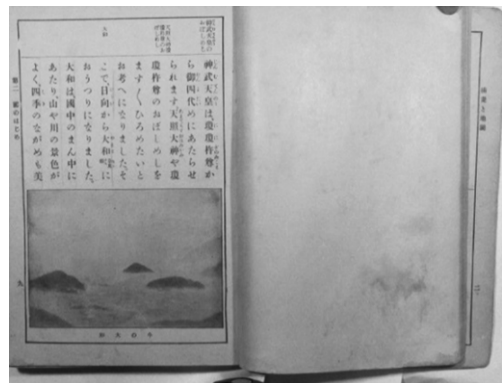
文部省『初等科地理』1943



文部省『初等科地理』1943



「大和の春」1938『朝鮮国史地理』



朝鮮『初等国史』上、1939

的座標として再現された。風景は写実的であればあるほど、国家を鮮明に見せるものであった。産業風景は芸術家や写真家のテーマにはならなかったが、観光ガイドや教科書など帝国空間の宣伝が必要な場には抜けられない要素であった。一方、1939年から増える自然風景は、ピクチャレスクの機能しながら唱歌や文学に参考になり、特定風景や地域を認識する方法を形付けた。教科書の写真は風景を都市へ、教室へ送り、自然と都市の間のつながりを演出した。教科書における風景写真の使用と普及は、ヒトと場所の間の関係を鑄造した。たとえ、読み手が風景写真を国家的ものとしてちゃんと解釈したかどうかは不明である。しかし、教科書の風景写真が実物とその代理イメージの関係から離れて、イメージと見る側の解釈を念頭に置いた使用方法へ変わったのは確かである。ヒトがその場所をどう解釈するかを優先する際に、国家概念の説明はイメージの参照なしには不可能になったのは確かである。

おわりに

以上、戦前地理教科書における国家・帝国の空間がどのような内容や技法で演出されたかを写真を通じて考察した。教科書の写真は被写体をありのまま写した写実的なものだけではなく、当代の事物や場所観を反映している。風景は我々を巻き込んだ空間に対するまなざし総体であり、教科書の風景写真は、写真が教育に導入された時期から学習者に自らの属する社会空間を認識させるメディアであった。帝国の広領域を知覚的に伝えるために、教科書が選んだ写真を通史的に分析した結果、同じものに異なる意味、新たな事実を伝えるために新たなイメージを使うなど変化がみえた。

本論では、領土全体に対する概括方法が領土個々を命名して説明することから、領土全体を一つの単位として意味づける方へ変わった。ハーヴィの区間認識単位に基づいて教科書の風景写真を再構成する結果、帝国の内外の境界、植民地を含んだ帝国内部の有機的繋がり、自然風景の技法や演出の変化から見える帝国の象徴の3つに分けて考察した。第一、本来目に見えない国境線は大陸の場合、記念碑や警備軍の身体で表現され、包括や断絶の意味を作り出した。海の向こうの地域の場合、帝国内的関連性は異人種の写真を使って国境線を可視化した。特に、

戦時期の新たな領土に対しては帝国日本のまなざしを取り入れた風景写真を使った。第二、帝国空間の内的つながりは技術文明、特に交通機関や橋、トンネルなどの通過装置で可視化された。帝国の表面を横渡る汽車や汽船や飛行機の路線図は、帝国を漠然とした広領域の空間ではなく、時間計算で到達できる空間、交通機関でつながっている均質な空間として想像可能になったのである。また教科書の地域写真は各地域の代表的風景を示しながらも、教科書上に並べられた他の地域風景の中で当地域の位置を表すなど両面的過程を経て、結果的に帝国の中心と周辺を分ける解釈の端緒を提供した。第三、産業風景と異なる形で自然風景は帝国空間を保護されるべき、無垢な場所として分節し、「絵のような」イメージは精神性と繋がって語られた。帝国内にある山々や自然風景は風景を眺める一種の感情形成を誘導することで、見る側に解釈する余地を与えている点で従来の風景イメージと異なる。

教科書は、場所と主体をつなげ、広領域と日常をつなげるために様々な内容と配置、技法が駆使された場である。国家・帝国認識が強調された戦前の地理教科書は、1920年代は外部の事物や風景をありのまま見せることでその連合体として国家・帝国を伝えようとしたが、戦時期の1930年代末からは見る側の解釈が促進されるようにイメージを羅列、配置して教科書と学習者の相互関係や想起機能を強調した。本稿は帝国空間の視覚的演出を見るために、教科書の中で場所に関するイメージが一番多い地理教科書をあつかった。当代の空間の表現的特徴をより立体化してみるために、国語や修身など他教科書の国家・帝国のイメージと比べる必要があるが、今後の課題にしようとする。

参考文献

- 文部省刊行『尋常小学地理』1910；『尋常小学地理書』1918-1919；『尋常小学地理書』1925；『尋常小学地理書』1929-1930；『尋常小学地理書』1938-1939；『初等科地理』1943
台湾総督府刊行『公学校地理書』1920-1921；『公学校地理書』1924；『公学校地理書』1931；『公学校地理書』1941-1942
朝鮮総督府刊行『普通学校地理補充教材』1923；『初等地理書』1932-1933；『初等地理』1937；『国史地理』1938；

『初等地理』1940；『初等地理』1944
南満州教育会教科書編輯部『満洲補充地理歴史教科書』
1933・1938日本人用；『満洲補充地理教科書』1935満洲人
用
関東局在満洲教務部教科書編輯部『皇国の姿』1942・1943
朝鮮教育会『朝鮮資料写真（1929）：国定教科書に現はれた
る』東京：韓国書籍センター、1996
南洋景観写真『外南洋の現勢』1939

柄谷行人『日本近代文学の起源』岩波書店、2008
白柳弘幸「戦前文部省・台湾総督府・朝鮮総督府発行教科書
の発行年比較」『植民地教育史研究年報』(11)、pp109-127、
皓星社、2008
武田信明『「個室」と「まなざし」：菊富士ホテルから見
る「大正」空間』講談社、1995。
富山太佳夫『つくられた自然』岩波書店、2003
細馬宏通『浅草十二階：塔の眺めと「近代」のまなざし』
青土社、2011

***分量の制限のために、脚注に挙げられた文献は参考文献
に再び掲載しません。

注

- 1) その意味で、本研究は教科書イメージの受容側研究で
はない。教科書刊行者の頭の中にある帝国・国家の空間
理解であり、児童への提示方法の進化に注目するもの
である。
- 2) 大澤真幸、吉見俊哉、鷺田清一編『現代社会学事典』弘
文堂、2012
- 3) Ryan James, R, 1997 *Picturing Empire: Photography
and the Visualization of the British Empire*, Reak-
tion Books
- 4) 鳥原学『日本写真史』中央公論新社、2013
- 5) 佐藤健二『風景の生産・風景の解放：メディアのアルケ
オロジー』講談社、1994
- 6) 中村隆文『「視線」からみた日本近代』京都大学学術出
版会、2000
- 7) 村山朝子「大正期における国定小学地理教科書の展開」
『茨城地理』(11)、pp35-48、茨城地理学会、2010

- 8) Jens Jager, 2003 “Framing Nation” in, *Picturing
place*, edited by Joan M. Schwartz・James R. Ryan,
London : I.B. Tauris
- 9) 武島良成「中学校の歴史教科書で使用する写真に関す
る一考察：第一次世界大戦から太平洋戦争まで」『京都
教育大学紀要』112、pp53-67、2008
- 10) 森茂岳雄「アメリカの歴史教科書における日系人に関
する記述の分析」、『東京学芸大学紀要・第3部門社会
科学』50、pp91-105、1999
- 11) Derek Gregory, 1994. *Geographical imaginations*,
Cambridge, MA : Blackwell, p34
- 12) 同じ時期の台湾の地理教科書(1924)と比較すると、「我
が大日本帝国はアジア州の東部に位して、太平洋中に
長くつづいている大小数千の島々と、朝鮮半島から成
り立っています。島の主なものは本州、四国、九州、台
湾、北海道本道、樺太です。全国の面積は4万三千余方
里で凡そその三分の一は本州、三分の一は朝鮮、残り三
分の一はその他の地方です。」と書いて、帝国領土の説
明に全体と部分の比率を表現する。
- 13) Anderson Benedict, 白石隆, 白石さや訳『定本想像の
共同体：ナショナリズムの起源と流行』図書新聞、
2007、p221
- 14) 小風秀雅『帝国主義下の日本海運』山川出版社、1995
- 15) 荒山彰久『日本の空のパイオニアたち：明治・大正18年
間の航空開拓史』早稲田大学出版部、2013
- 16) 武田信明『「写生」と「歩行」』富山太佳夫外『つくられ
た自然』、岩波書店、2003
- 17) 佐藤守弘『鉄道写真蒐集の欲望』『京都精華大学紀要』
(39)、pp49-72、2011
- 18) 武田信明『「個室」と「まなざし」：菊富士ホテルから見
る「大正」空間』講談社、1995
- 19) 細馬宏通『浅草十二階：塔の眺めと「近代」のまなざし』
青土社、2011
- 20) Mitchell W.J.T. 篠儀直子訳『帝国の風景』『10+1(9)』
pp149-169、INAX、1997
- 21) 紫崎は、唱歌教科書における富士山の歌をとりあげて、
1900-1910年代の歌に比べて、1930-1940年代の山描写
がどう変わったかを分析している。紫崎信三『「富士」
という場所』『現代思想』41-14、現代思想社、2013
- 22) 尾崎信一郎外『日本近現代美術史事典』東京書籍、2007